

# 斬壺（きりつぼ）

木下望太郎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

秘太刀 “斬壺（きりつぼ）”。

その技を以て、老剣客はかつて岩を斬り、壺を斬った——割ることも砕くこともなく、真二つに——。

ただしそれができたのは、若き日のたった二度だけ。

そして今。辛苦の末に流派を継いだ彼が対峙するのは、剣才そのもののような少年。それはまるで、老剣客の積み上げたもの全てを嘲笑うかのような存在。

もし、奴を斬ることができる技があるなら——それは一つ、“斬壺”。

凡人対天才。

今、その戦いが始まり、そして終わる――。

# 目次

最終話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
27	21	15	11	4	1

# 第1話

八島剛佐は信じていたのに。己の劍技を信じていたのに。今や目の前の一切が、剛佐にとつて信じられなかった。

大上段に構えた刀を、一気呵成かせいに振り下ろす——かわされる。下段に構え直すと同時、みぞおち目がけて突きを放つ——弾かれる、相手が手にした脇差に。

剛佐ごうざの顔は、白いものも混じる顎鬚あごひげは、洗ったように濡れていた。なのに目の前の賊は汗一つかいていない。剛佐の半分にも満たぬ齡格好わっぱの童は。

童はあくびを一つして、脇差の背で肩を叩く。もう片方の手で別の脇差をもてあそびながら。腰にずらりと吊るされた幾本もの脇差が、揺れて、からりと音を立てた。

「おっさん、ぼちぼち気がすんだか？ 命までは取りやあせん、銭も何も置いていけ」

山道に風が吹き、辺りの木がざわめく。剛佐は何も答えなかった。構える刀の切先が、絞るように震えていた。

踏み込む。同時、上段から振り下ろす。一面打ちと見せて、刀を横へ回し腰を落とし、脛を断ち斬る——つもりであった。

脇差に、刀は押さえられていた。脛どころか、自分の顔の高ささえ通り過ぎないうち

に。そしてもう一本の脇差は、剛佐の喉元に突きつけられていた。

童が笑う。

「おっさん置いてけ、全部置いてけ。銭も刀もなんもかも。命と身いだけ持って去（い）ね」

歯ぎしりの後、震える手で刀を納め。ようやく剛佐は口を開いた。

「拙者、八島やしまふっしん弘心流——」

五代宗家、という言葉は、口の中で噛み潰した。

「——八島やしまごうざえもんひろただ剛佐衛門むねただ紘忠。……お見それした、何流か」

ふ、と童が鼻で息をつく。

「よう聞かれるが。何流も糞もない、何とは無しにかわして斬って、それだけよ」

剛佐は口を開いたが、言葉は何も出てこなかった。

童が言う。

「わしにしてみりや全然分からん。太刀行きにしる脚にしる、何で皆そんなにのろいか。そののんびりした太刀を、何で、さつとかわせんのか。それで何で、さつさと斬らんか。何で出来んのか分かるん」

開いたままの剛佐の口に、汗が一筋流れ落ちた。

背筋を伸ばし、胸を張り、剛佐は宿へと帰りついた。顔は固く、表情はなく、腰に大小の刀はなかつた。

宿の者が声をかける。

「お武家様。遭えましたので、噂の賊——“刀狩り”には」

ぐ、と息を飲み込んで、剛佐は笑ってみせた。

「いや、とうとう遭えずじまいであつた。出てこようなら成敗してくれたものを」

左様で、と笑う宿の者は、じつ、と剛佐の腰を見ていた。

剛佐は部屋に上がり、残っていた荷物から硯一式を出す。文机の前に座し、姿勢を正して墨を磨つた。銭と刀を送るよう、家族へ宛てて簡潔にしたためる。文（ふみ）を乾かし、丁寧に折り、封をした後で。

氣づけば、握り潰していた。畳へ投げつけた文が、ぺちりと間抜けな音を立てた。立ち上がりざま文机を蹴る。吹っ飛んだ硯が障子を破り、畳に壁に墨が散つた。蹴つた、壁を、殴つた、畳を。額を柱に叩きつけた。目をつむつた闇の中、歯ぎしりの音を聞いた。

## 第2話

「何故出来ぬのかが分からぬ」

——かつて。腹の底から息をつき、肩を落としてそう言ったのだ。父は。八島弘心流四代宗家は。倒れた剛佐を見下ろすその目はまるで、不治の病にある者を見るかのようだった。三十年ほど前のことであった。

道場の床板の上、汗だまりに突っ伏して、剛佐は目だけ上げていた。口を開いても、かすれた息が漏れるだけで言葉は出なかった。それ以前に、何を言うつもりであるかも分からなかった。

弟、ひろたか紘孝が進み出る。

「父上、左様におっしゃられずとも。兄上ならきつと、この技もいつか必ず習得なさいましょう」

差し伸べられた手につかまり、身を起こしながら。剛佐は見た、優しげに微笑む弟を。その目の奥を。

握り潰したかった、その手を。けれども指は震えただけで、剛佐は力なく弟にもたれ



た。もうそうしたことは幾度目か分からなかった。そして、父がこう言うのも。

「この程度の技でその様では、到底宗家を継ぐことはなるまい。無論、修めることもできまいぞ。秘太刀、斬壺きりつぼをの」

斬壺。八島弘心流初代宗家が編み出した奥義である。初代をして生涯五度しか成功しなかったというその秘太刀は、術理のみ伝わるも、使い手は絶えて久しかった――

部屋に残していた銭から代金を叩きつけるように渡し、文を出すよう宿の者にことづけた後。

八島剛佐は駆けていた。宿場の人の間を縫い、肩がぶつかるのも構わず駆けていた。夜が青黒く覆いかぶさる空の中、行く手に沈む日だけが赤々と燃えていた。

人影のない町外れ、道から外れた草むらで。剛佐は腰に手をやった。手が空をつかんだところで、刀がないことをようやく思い出す。顔を歪ませたまま、辺りの木立から枯れ枝を拾う。枝葉を払い、木刀のように構え、振った。打ち据えるように。

何故だ。

剛佐はそう問うた。何故だ、何故だ、と、そう問うた。

頭の内に童の顔が浮かぶ。歯を見せて笑った顔、そこに父の、弟の顔が重なる。

まとめて打ち払うように、剛佐は強く杖を振った。

何故だ。越えたはずなのに、なぜまた嘲笑われねばならん。何故だ、何故だ。

そう、越えたはずであつた、父のことも弟も。秘太刀「斬壺」の会得を以て。

——その夜の剛佐も今と似ていた。父になじられ弟にかばわれた稽古が終わり、気絶するように眠つた後。一人庭に出、腰の刀を近くに置き、木刀を手に素振りをしていた。打ち据えるように何度も何度も。打ち据えたかつたのは父か、弟か、それとも己かは分からなかつた。

素振りの後、その日教えられた技をさらい、型をなぞる。いつしかその動きは教えられたものではなく、父が稽古していたのを見た「斬壺」の型になつていた。

伝によれば。初代宗家はその技を以て、壺を斬ることが出来たという。無論、壺など割ることは誰にでも出来る。初代はそれを、斬つた。生涯のうちに壺を二度、漬物石を二度。いずれも、下に据えた台には傷もつけずに。五度の秘太刀のうち最後の一度、それは墓石に、己の墓に据えるための石に、ずか、と切れ込みを入れたという。

斬壺の術理、その骨子は二つ。太刀行きと手の内である。太刀行きとは、すなわち剣速。常の技のような一步の踏み込みではない、三步の助走。その勢いを足裏から足首、

足首から脛、脛から膝。腰、背骨の一節一節、肩、腕、肘、手首、手指、柄、刀身、そしてようやく切先へと余すことなく、加速しながら伝える。これにより生まれる神速の太刀行きが、切先に限界まで破壊力を与える。

その破壊力を切断力へと変えるのが手の内、すなわち柄の握りである。太刀を振るう向きによつて握りを変えるのが常の剣術であったが、斬壺はそれに留まらなかった。太刀が当たった瞬間、その感触に応じて、斬りながらも自在に握りを締め、あるいは緩める。それにより刃は物体に抵抗することなく滑り、食い込み、撫で切り、断ち斬る。脆い壺を砕くことなく、硬い石に刃を折ることなく。

両手で持った木刀を、剛佐は右肩の前で立てた。左足を半歩前に出す、八双の構え。三步踏み込み、振るう。再び構え、踏み込み、振るう。重く夜気を裂くその音は、どうにもいつも通りだった。

「兄上、精が出ますな。秘太刀の稽古にござりますか」

弟が庭に下りていた。手には二振り、袋竹刀ふくろしなひ——割竹を細長い袋に入れたもの——を提げている。

「しかし兄上。お言葉ですが、別の稽古をなさった方がよろしいのでは」  
「……どういう意味だ」

剛佐の視線を避けるように、弟は首を横に振る。笑つて。

「いえ、言葉どおりにござります。我らが流派の秘伝とはいえ、誰も使い手のおらぬ技。実在すら怪しいのではないかと……正直、左様に思いますので」

剛佐は表情を変えなかった。強く握る手に、だらりと下げていた木刀の先が上を向いた。

「嘘ごとと、そう申すか。我らが劍が、その最奥が」

弟は変わらず笑っていた。

「いえいえ、仮の話にござります。それより一つ、竹刀稽古でもいかが」

弟が差し出す竹刀を、何も言わずに取った。一礼の後、互いに構える。

いつもの稽古と同じだった。剛佐の竹刀が当たる前に、弟のそれが剛佐を打った。振り上げる出がかりを抑えられ、振り下ろしたところを弾かれ、その隙を打たれ。三本に一本取り返せればよい方だった。

最後、苦し紛れながら全力を込めた、斬壺の型は。あつさりとかわされ、胴を打たれた。

「よい稽古になりました。ありがとうございます、兄上」

額の汗を拭う弟は、変わらず笑っていた。

剛佐に表情はなかった。汗も拭わず、あいまいにうなずいて立ち尽くしていた。

弟が部屋へと戻ってしばらくの後。剛佐は立てかけていた刀を取った。鞘を放り捨

て、構えるのももどかしく振るう。柄を絞り折るような力を腕に込めて。砕くように歯を噛み締めながら。己の腕を千切ろうとするかのように、剛佐は剣を振るい続けた。

どれほどの時が経ったであろうか。気づけば空が白んでいた。荒かった息はかすれ、途切れ途切れにさえなっていた。汗に濡れそぼった着物は外気と同じ温度をしていた。疲れ切ったはずの腕は、何故だか刀の重みを感じなかった。指も柄から離れようとしなかった、まるで、ぴたりと吸いついたように。刀の一部になつたかのように。

剛佐は口を開けていた。空が白いと、ただそう思った。それ以外の思考はなかった。空を映す刀身のように。

ふらりと刀が動いた、気がした。その切先の方を見れば、庭石があつた。肩ほどの高さがある庭石。斬れそうだな、と、そう思った。口を開けたまま。

気づいたときには構えていた。八双の構えだった。考えたわけでもなく距離を取る。岩へ向かつて三步の間合い。

駆けていた。地を蹴る堅い反動が、足の裏から土踏まずへ走る。足首へ巡り、骨を伝い肉を駆ける。腰のひねり、背骨のしなり、腕の力がそれに加わる。斬り下ろす刀が庭石に触れた瞬間、勝手に左手が締まり、右手は緩まっていた。手に感触はなかった。わずかにかち合う音だけが聞こえた。気づけば庭石の頭に、ずかりと刀が食い込んでいた。

未だ柄から手が離れぬまま、どうやって刀を抜いたものかと考え始めたとき。寝間着の父が、裸足のまま駆けてくるのが見えた。

その朝の内に、剛佐は壺を両断した。父と弟、幾人かの直弟子の前で。初代の伝にあるとおり、据えた台には傷一つつけず――

今。剛佐は枝を手に、斬壺の構えを取る。何度も繰り返した動き。三步の運足、地を蹴る勢いを刀に込め、振り下ろす。空を裂く音はどうにも重かった。もう一度繰り返しても、音は変わらず重かった。

振り下ろした姿勢のまま、剛佐は身じろぎもせずにしたが。やがて息をつき、肩を落とす。

「こんな枝ではどうにもならぬか」

分かつていた。木刀で素振ろうが、刀で試し斬りしようが。斬壺を使ったことは、若き日の二度だけであったことを。どうしてそれが出来たのか、自分にも分からないことを。

いくらか残った小枝を丁寧に払い、再び振ったが。やはり、音は変わらなかつた。

## 第3話

次の日。剛佐は再び童とまみえた。偶然に、である。

宿場町を行き交う人に交じり、剛佐の行く手から童が歩いてきていた。肩には何やら、薦こもにくるんだ長い束をかついでいる。

剛佐はそちらへ駆け出しかけた。が、行つてどうするのか自分でも分からず、足を止める。

目を伏せ、建物の陰に入ろうとしたのに。童は向こうから声をかけてきた。

「おっさん。昨日は世話になったの。怪我あないか」

からりと笑う童の腰には、変わらず何本かの脇差があつた。その一つは剛佐のものだ。

「む、うむ……」

言葉を濁す剛佐に構わず、童は喋つた。

「そらあ良かった。わしやあほれ、小商いに下りてきたとこじやよつて。今日はお陰でうまい飯が食えそうや。有難う」

童は笑つて、かついだ束を軽く叩く。薦の下には幾本もの刀が見えた。無論その一つには見覚えがある。

顔に熱を感じながら、道ゆく者の視線を感じながら、剛佐は言つていた。

「……なぜ、刀を狩る。弁慶のひそみに倣おうとてか、武士に恨みでもあるか」  
童は息をこぼして笑う。

「そんな大仰なもんやない、恨みがあるなら命も取つとる。楽に飯食うためよ」  
かつぎ直した刀が音を立てる。

「どいつもこいつもものんびりした太刀や、あくびしながら片づけられる。それに武士だけ襲うんなら、後々面倒にはならん。斬り剥ぎされたなんぞお上に言われんけえの。恥の体面のとて、お武家は色々あるらしいよつて」

剛佐は目を見開き、口を開けていた。

歯を噛み締める。震える手を握り締める。叩きつけるように、頭を下げていた。

「再びの……再びの立ち合いを、所望いたす」

童は鼻で息をつく。

「言うても。太刀もなかうし、一度拾うた命ぞ。二度捨てに来ることも——」

下げたままの剛佐の顔は、硬く歪んでいた。

「所望いたす」



「お断りじや。銭も刀ももうとる、他に取るもんなからうが」

「命を」

「かつ、と童が喉を鳴らす。

「呆気<sup>ぼけ</sup>が。命は買えんが、売れんのじや。わしの商いにならん」

上げた顔を、ずい、と剛佐は寄せる。鼻と鼻とをぶつけるように、目玉の奥をにらむように。かぶりつくように、口を開いた。

「銭も刀も用意いたす、立ち合いを。十日後、日の出、昨日の場所にて」

言い捨て、剛佐は背を向ける。

背中ごしに、ため息の後で声が聞こえた。

「せいぜいたんまり持って来ときな。まけてやる気はないけえの」

町外れまで歩き、剛佐は棒切れを拾った。昨日手にした杖だった。

振るった。満身の力を込めて。何度もそうした後、近くの木立へ駆け、木へと打ちかかった。切り倒そうとでもいうかのように、何度も何度も。

先ほど童と話したとき。つかみかかりたかった。絞め殺したかった、あの場で。そうしていれば、死んでいたのは剛佐の方だったろうが。

何故だ、と問うた。何故敗れたのか、立ち合いを商いなどと言う者に。何故あのようこわつぱな小童に。

そして、何故。自分はあるの童ではないのか。あれほどの才を、全てを鼻で笑えるほどの才を持った者でないのか。

剛佐は何度も木を打った。それはもはや修行ではなかつた。

やがて音を立て、棒が二つに折れ飛んだとき。荒い息の下、剛佐は腹の奥で笑った。もしも童の首が飛んだなら、同じ笑いが漏れるのだろう。そう考えて、また別の棒を探した。

## 第4話

数日の後、ことづけておいた銭と刀は来た。余計な者と一緒に。

「兄上、お言いつけのものをお持ちいたしました」

八島<sup>ひろたか</sup>紘孝。父亡き今、留守を任せてあるはずの弟が自ら来ていた。

頭を下げて代金を待たせてある宿の自室で、剛佐は弟から目をそらす。

「……ご苦労だったな」

背筋を伸ばし、弟は言う。

「不<sup>ぶ</sup>躰<sup>しつ</sup>ながらお尋ねいたす。銭は分かり申す。一人修行に出たといえ、恥掻き捨てる旅の道、ついついの散財もござりましょう。またあるいは、うっかりと失くす、これも無いことではござりますまい。しかし。お腰のものを送れとは、いかなる事情にございましょうや」

「聞くな」

「無礼ながら。町の者どもが噂しており申す、武士のみを狙う斬り剥ぎが山中に出ると。

その賊の剣技相当のものにて、命を取らず銭と刀のみを奪うと。よもや兄上——」

踏みしだくように畳を蹴り、剛佐は立ち上がった。

「ついで参れ」

それだけ言つて宿を出ていく。弟も後へ続いた。

着いた場所は町外れ。数日来、剛佐が棒切れを振るつてゐる場所であつた。

「取れ」

言つて、弟へ棒を放る。自らも別の棒を取り、構えた。

「参れ」

「兄上?」

「参れ」

いぶかしげな顔をしながらも弟は構える。そこへ剛佐は打ち込んだ。高い音を立てて棒がかち合う。剛佐はそこから手を緩めず、連続で打ち込んだ。弟は防ぎながらも押されるように後ずさる。

体勢を立て直そうと弟が跳びすさる、そこへ。剛佐も跳び込んでいた。弟と同じ距離の跳躍、しかし身を開いて片腕を伸ばして。剛佐の片手突きは弟の間合いの外から、正確に喉をとらえていた。寸前で止めてはいたが。

棒を下ろし、剛佐は言う。

「もう一本」

何合か打ち合った後、弟が棒を振り上げようとしたその瞬間。空いた小手を、剛佐の棒がぴたりと押さえる。無論、本来なら打てていた隙だった。

「もう一本」

振り下ろされる棒をはね飛ばし。剛佐は肩へと、したたかに打ち込む。今度は止めなかった。

「取れ」

肩を押さえてうづくまる弟に再び棒を差し出し、剛佐は続けた。

「わしが弱いか」

「兄上、何を……」

「わしが弱いかと聞いておるー」

打った。うづくまる弟の頬を、棒で。無理やりに立たせ、さらに打ち込んだ。

かつて斬壺を成功させた後、剛佐は全ての技を会得した。弟ほどすぐに覚えられたわけではないが、それまでに比べれば遙かに早く、技の骨子を押さえることができた。斬壺を抜きにしても今や弟を越え、先代にも比肩し得る腕となった、そう自負していた。

腕に顔にあざを作って倒れた、弟へと言い放つ。

「思い違うな。斬らねばならん糞虫がおる、故に刀が要る。それだけよ」

弟は目を伏せながら顔を上げた。

「……心得、申した。しかし、いかにして」

胸の内から押し出すように、剛佐は声を絞り出した。

「斬壺」

その日から。宿場町には妙な光景が見られた。陶物屋すえものといわず古道具屋といわず、宿、酒屋、商家ではない家々までに。壺を売ってくれ、と武士が尋ねてくるのである。

町外れではさらに奇妙な光景があつた。店開きでもしたかのように、ずらりと壺の並び前に。抜き身の刀を手にした、年かきの武士がいた。仇でも討ちにいくかのように、白鉢巻に白だすき、袴の裾をからげた姿で。そのそばには壺を買い集めた武士が、いかにも厳肅な面持ちで控えていた。桶から柄杓で、白鉢巻の武士が手にした刀へ水を注ぐ。それはまるで、介錯の際の作法であつた。

白鉢巻の武士は助走をつけ、裂帛れつぱくの気合いと共に壺へと刀を振り下ろす。当然の如く壺は割れた。いくつかの破片に。

武士はなぜだか歯噛みして、また別の壺へ刀を振り下ろす。それも同じように割れる。そんなことが繰り返された。遠巻きに眺める町の者もまばらにあつた。

全ての壺を割り終えても、武士の表情は決して晴れなかつた。次の日、また次の日も、

徳利といわず土鍋といわず、さらに陶物が買い集められた。

「明朝にござりまするな」

おぼろげな行灯の光の中、宿で弟はそう言った。

開け放った障子の前、月明かりの下で剛佐はうなずく。何も言わずに。

「勝算は」

弟の声に剛佐はまた、うなずく。

弟がゆつくりと、強く目をつむる。平伏した。

「お逃げなさいませ」

何も言わずにいると、弟は伏したまま続けた。

「兄上が、斬壺なくば勝てぬというほどの相手であれば。……勝ちは、ございますまい」

剛佐は答えず、身じろぎもしない。

弟が顔を上げた。その目に白く月明かりが映る。

「もしも立ち合うと仰るならば。拙者も、加勢を」

「たわけ」

つぶやくように剛佐は言った。

「立ち合いは一人と一人。他は無い」

「されど……」

剛佐は立ち上がり、刀を手に部屋を出る。

「もう言うな。先に休め」

月明かりの下を一人、町外れへと歩く。壺の破片が散らばる辺りへと着いて、剛佐は刀を抜いた。軽く振る。あまりにも、いつもの手応え。

剛佐は腕をだらりと下げ、ため息をついた。加勢させることができるなら、それである童をなぶり殺せるなら、どんなによいか。けれど流派の長として、いや、剣士として。それだけは出来なかった。それどころか。下手をすれば、弟ともども斬られるのではな  
いか——その光景が頭に浮かび、鳥肌が立った。

かぶりを振り、息をつく。見上げた月はただ白かった。



## 第5話

翌朝。空も白まぬうちに支度を済ませ、剛佐と弟は宿を出た。二人の間に言葉はなかった。

やがて日が昇り、空が白く輝いた頃。以前立ち合つた、街道脇の山道に童は待つていた。道端の岩に腰かけ、手持ちぶさたにか脇差をもてあそびながら。

腰かけたまま、頭をかきながら童が言う。

「来たかおっさん。銭は——」

「取れい」

懐から出した巾着を放る。童が受けたそれは、重く銭の音を立てた。

「何も先に渡さんでも」

「よい、三途の渡し賃と思え」

言いながらも剛佐の顔はこわばっていた。ああ、さつきの隙、巾着を受け止めた隙に斬りかかつていれば。殺せていたかも知れないのに。

「それじゃまあ、遠慮のう。ときに今日は助太刀付きか」

「これはただの立ち会い人、手出しはさせぬ。うぬも、こやつに手出しはしてくるな」  
童は立ち上がりながら言う。

「そらあ構わんが……そうじゃ、先に銭もらうて悪いけえの。これだけでも返しとくわ、そら」

腰に差した何本もの脇差、そこから一つを鞘ごと抜いて放る。見覚えのあるそれは剛佐の脇差だった。

両手を伸ばし、受け止めたそのとき。獣の速さで走り込んだ童が、その抜き放った刃が。剛佐の目の前にあった。

「もう死んだぞ。……命は返したる、刀置いて去ね」

手にした脇差を取り落とし、剛佐は笑った。笑っていた、息をこぼし、肩を揺すり、腹の奥から声を漏らして。

握った、突きつけられた刃の峰を。もう片方の手で拳固をくれた、あつけにとられたような童の顔に。

「ふぎけるな。これでも死んだか、わしが死んでおるか！」

跳び退き、刀を抜き放つ。三步の運足、全身の力で振り下ろす刀。

斬壺の型で放ったそれはしかし、受け止められていた。童が構えた二本の脇差で、挟むように。片方の脇差で刀を押さえたまま、もう一本を童は横へ抜いた。そして剛佐の

胴を払う。どうにか退いてかわせたが、着物の前が裂けていた。

舌打ちした童が構え直す。

剛佐は間合いを取りながら下段へ構える。飛び込んできたなら刀を上げて脇差を払い、その隙に斬り込む——そのつもりだったが。先に弾かれたのは剛佐の刀だった。もう一本の脇差が斬りかかってくる寸前、何とか跳び退く。刃にさらわれた髭が、何本か宙を舞った。

歯を噛み締めて斬り返す。童の手にした脇差、その一方を手から弾き飛ばした。が、その手応えはあまりに軽かった。童は表情も変えず、残った脇差で刀を押さえた。空いた手で腰から別の脇差を抜き、斬りかかってくる。剛佐の目の前を刃が過ぎる。斬られていた、ほんの少し脇差が長ければ。いや、まともに踏み込まれていれば。

その後も同じだった、斬りかかっては返され、返しかけては斬りかかられ。防ぎ、かわすのがやっとであった。

どれほどそうしていた頃か。自らでも一足には跳べないほど間合いを取り、童は口を開いた。構えを解き、柄で頭をかきながら。

「おっさん、腕え上げたか。前よりやだいぶやるやないか」

構えを崩さず、流れ落ちる汗も拭わず剛佐は言う。

「……手<sup>手加減</sup>心か」

童は笑った。何とも、晴れた空のような笑みだった。

「何のことやら」

剛佐は長く息をついた。長く長く息をついた。それはため息ではなく、紙風船がしぼむような、そんな息だった。

どうしたのだろうか、あの技は。若き日、溶けそうなほど汗にまみれて覚えた技の数々は。それらは確かに今も、拭い去れぬほど体に染みついているというのに。そして、手心か。

「ふ……ふふ。はは、くっははは」

笑っていた。童と同じ顔で。見上げた空は青かった。日はその光に黄色みを帯びて、山の上で輝いていた。

剛佐は刀を地に突き立て、その場に座した。背筋を伸ばし、手を地につけて。平伏した。

「お見事。お見事なり」

童が手を下ろしたのか、脇差の鞘が、からりと鳴った。

伏したまま剛佐は言う。

「貴殿、既にして剣の達人なり。見込んで御願いが申し申す、二つ」

顔を上げて続ける。

「一つ。貴殿に習い覚えた流派はなからう、しからば。我が流派、八島弘心流に加わられない」

「兄上？」

弟の声が飛んだが、剛佐の表情は変わらなかった。

「貴殿の才に我が流派の術理加われば。必ずや天下に恥じぬ名人とならう、斬り剥ぎなどでなく」

童はただ口を開け、目を瞬かせているばかりだった。

構わず剛佐は再び伏す。額まで地につけて。

「二つ。拙者と立ち合いを。真に真剣の立ち合いを」

「兄上！」

「黙りおれ！……立ち合いを、所望いたす」

風が吹いた。木々がざわめく。剛佐の頬から汗が滴った。

「おっさん。……顔上げてくれ」

童は脇差を納めていた。頭をかきながら言う。

「よう分からんが。わしゃ武士やない、あんたのことも斬りとうはない。お断りじゃ」

「ならば……賭けぬか」

剛佐は立ち上がり、刀を手にする。

「貴殿がどうあろうと、拙者は斬りかかる。貴殿が立ち合うまで何度でも。それで貴殿が勝てば、三十……いや、五十両差し上げ申そう」

「兄上、何を……」

弟が駆け寄るが、剛佐はその手を払いのけた。

「黙れ。借財しても構わん、そのときは何としても用意いたせ」

童の方へ向き直って続ける。

「その代わり。拙者が勝てば、我らが門下に加わっていたたく」

何度も目を瞬かせた後、声をこぼして童は笑う。

「おっさん、そりゃ話がおかしかる。わしが勝ったときやええが、おっさんが勝ったときやあ。わしや斬られて命がなかる、どないして弟子入りせえ言うんじや」

剛佐は円く口を開けた。ふ、と息をついて笑う。

「そうか。そうじやの、可笑しいの。ま、忘れてくれても構わん」

土を払い、刀身を拭う。構えた。

「参るぞ。……抜けい」

## 最終話

童が脇差を抜くのを見てから、剛佐は駆けた。

汗に重く濡れたはずの体は軽かった、羽根でも生えたように。腕も同様だった。刀の重みはまるでなく、まるで掌から柄が、刀が生えているようだった。自然と姿勢は八双の構え、斬壺の構えとなっていた。

駆け、踏み出す一足ごとに、剛佐の体は軽くなった。一足に継ぐ一足、そのたび剛佐は速くなった。地の堅さ砂利の硬さ、足裏の足指の骨の軋み肉の張り、血の巡り。一足ごとにそれが分かった。

駆け来る童の刃が迫る。

最後の三步を剛佐は駆けた。腰から背骨、肩から腕、肘。手首から十指、柄から刀身。今や剛佐の体には、重みも力みも一切無かった。それらはすでに一点、切先へと伝えられていた。

童が突き出す脇差、今の剛佐にはそれらが遅く見えた。まるでぼた雪が降るように、ゆるりと出される二本の刃。その間を流星のように、剛佐の刀が過ぎる。

童の体へと当たる瞬間。剛佐の十指がかすかに動き、手の内を、握りを決める。自在に緩め、的確に締め、振り抜く。剛佐の刀は確かに、童の体の上を走った。最初に触れたものを、何の抵抗もなく斬り裂きながら。

その後で。ゆるりゆるりと、剛佐の体に脇差が突き立つ。

脇差を握った両の手を突き出したまま、童は立ち尽くしていた。

確かに。確かに、自分は斬られていた。全力で突いたはずの脇差がまるで敵わないほどの速さで。

なのにもどこにも傷はなかった。傷があるのは相手の方だった。刀を振り下ろした姿のまま、喉を貫かれ胸をえぐられ、息絶えていた。

風が吹いた。流れ落ちる血が香った。そのままの姿勢で二人はいた。

目を瞬かせ、口を開けたまま、童は両の脇差を抜いた。支えを失い、相手の体は、どう、と地に伏す。

そのとき。走った、傷口が。童の体の上を。

ぴりり、と着物の前が裂け、帯が二つに斬り落とされた。がらりがらりと音を立て、腰の鞘が、脇差が、落ちた。腹にも、胸にも傷はなかった。

風が吹いた。



童は変わらず立ち尽くした。木々が鳴る中、立ち会い人が駆け寄る音が聞こえた。相手の目は。額を土に汚し、刀を握ったまま伏した、その口の端は。笑っていた。

八島弘心流五代宗家、八島剛佐衛門絃忠、旅先にて没する。その後、弟である絃孝が六代を継いだ。

その後、六代は養子を取った。養子は名を改めて、剛四郎絃忠といった。

剛四郎は後に、小太刀を取っては当世無双と謳われる名人となった。しかし、秘太刀“斬壺”は隠居の後、晩年に一度、成功したのみだったという。

(了)